東京妓情

醉多道士戲著

下

ヲ6
435
3

東京帝國大學圖書之印
昭和十年十月拾貳番購入

東京妓情巻之下

花柳御門　醉多道士戲著

○妓の成立

石崇の緑珠吾知らざる也。源郎の静姫吾知らざる也否之を知るも此を平康の籍に附しく垂柳門頭に立ち。蕩子を招ぐの妓と見做し以て澆季の蘇小と比するを憐むなり。

○可憫被夜鷹視

○魔王曰情人則有侠

凡妓のりく以來深川の諸姐を知らば。今の妓ほど野卑かるゝものもなからん。又侠なきも

津ヲ
門 435
巻 3

明治三十六年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

○憾慨

のをあらず。蓋しその野卑に陷りたるハ妓乃罪あらざるべして遊客の罪ふる乎抑亦時勢の然らしむる所乎昔を妓とかるにを皆ふ少女の時うり夥多れ辛苦を嘗め。艱難を経て漸く半玉となる。更ゐ諸姐に揉まれ引廻されぬ始めく一幟を立てしものなるゑ。今を十中二三を一足飛に妓とかる者ハり則ち良家の阿娘ゐしく姿色ハるその又を技藝ハるもの。その家零落しく活計のためにを之

○中洲曰醉翁老故愚痴如斯

○蛙之子即蛙

をなそをその或を茶肆の女ハく三絃を弄をるもの。自家に來る客を的てをる者其他權妻乃古手。三味線の師匠。その下等ふしく應來一途を現をる者を。私窩子あり湯屋の茶汲女ハり。酒樓の婢女ハり。若し照魔鏡を以く子細くを照せば。異類異形の種族ハるや明うなり。その野卑あるを侠氣あき亦何ぞ怪しむに足らんや。然をでこそ。同じく妓籍に入りかがら。柳橋に出づるを難うる

○有三毛有斑毛有黑有赤

○白痴與登要路何擇

ものなり。赤坂より出づるとその所とするものなり。是れ妓とかるるまでの原素に関係すべきなり

妓の成立に三種の別あり曰く自前曰く抱へ曰く叩き別是れなり

○自前

他人の束縛をうけざる他人の支配を蒙らざる自侭氣侭なる者之を自前といふ自前の中小又二途なり

○醒史曰妓亦講自由主義

○其一

親もなく良人もなく。自らの一戸の主となりて技をうるものの。之を妓中第一の地位なる在るものとす。如何となれば。その身更らに人の束縛を受けざる。小言を云ふ者もなく。稼ぐ所の金も尤取りあつめて。耗途少なく。又心さ好なぬ客なきを体よく断りて應ぜざるも彼此れ言もれば。或も氣保養に次郎さんと手を取りて游さんとん欲せば。唯會

○魔王曰呆返口不聞

所の名札を裏返へして置けも十日廿日出勤せばしも。我ゞ勝手にしく些の苦情あく総て我侭一杯を行もるものなり。

○其二

その名を自前かれども親掛りあるゞ故ゑ我ゞ自由を行ふたと能もば。その得る處の金を悉く親さ納れ。其身も纔らに小遣ひ銭を貰ふのみ。然る代り衣裳萬端の責を負も皆か親の手ふり之と辨ど購もく む然れ

○應求債乃特別

○補不足所只如意棒

○醒史曰與日本人民無庭径

ども その親他になもべき業ありて少りたりとも女の足らざる所を補へど。その妓を好造化かもとも。若し一も女二も女と女を的こもる親なもを所謂太郎兵衛駕籠みて その妓こそ我ゞ金我か自由なりば。言ど犬骨損のみ。されも斯る親子の間ゆい往々苦情起も情夫と逃亡し又も前金を借りて他の抱へとかる者ありり何もにしくも斯の如き自前を憫然の文字を遁ぐれざる者

なり

○抱へ

自前乃妓となるゝん乎。家屋及び衣裳等の資本なし。若し夫れ此の若干金ありとせば親縦へ貪婪飽くあとを知らざる者と雖も豈その女を餌とゝ更らに慾の皮を突張らんや。その此あゝ且つ金を焼眉の急あるより女の姿色或ハ技藝を抵當とゝ前金を借り。抱への藝者となる。抱へも衣食住に於

○仙史曰多矣哉抵當種類

て苦労なゝと雖ども。その得る所の金を纏頭と羌せゝ抱へ主へ納れ。半文銭だも手に留まらゞ。偶ふ欲しきものを得んが為めに窃かに春を鬻ぎ以て受けし金も誤て抱主の見認る所となれば。小言の上に奪取られ其身も寝骨折りて鴨毋丹取られる諺に陥る。その他一身上総て束縛を受くるが故に一日も氣保養らしき歓を取ることも能はゞ。殊に数日お茶を磑き。冷に逢へば抱主の氣

○使抱主政府是顛覆者

○粋史曰寫出妙

色を損じ辛き目を當てられ技量あるの惡口を頭上に振り掛けらも。歎息の息氣を數へて首を襟に入れ。畳の塵を撚りく欝ぐこと抱への藝者なも間々ある例あり。されど抱へい何の樂みなりく勤むる欲と問ちぐ情ある醉多らしい人を頼みに暮らにのみ

○中洲曰醉多二字可削

○叩き別け

衣裳あり姿色若くい技藝なり而しく一席を擔任せるの才なりと雖ども酒樓及び同

○妓社會モ亦依頼電信一

業に馴染なければ一幟を樹つる能はざる是れ歌妓社會の通慣なり。是ふ於て乎。姉妹株の家に依頼し此ふ寄寓し技を賣る者。之を叩き別けと云ふ。即ち得る所の揚代金を折半して別ける謂なり。されど叩き別けた。その戸主に三飯の世話をこそされ。他も一切保護を受けば。却て已より利する位あれば自由較行れ我侭稍働かも。親掛りあるぬ自前へと殆ど趣きを同ふすれども。只人の

○共和政事

○帰化之民可憫

家ハ寄寓するを以てその家を利せざれど氣の毒との情あるゆゑ故に自由の權も藤八拳ほどハ振りまはされず。況して他處より移住せし者ハ自ら一席も餘計賣りてその地位を固くせんとの情態あるものなり

歌妓の成立ちも大凡右の如くなれど若し妓を情婦よせんと欲せばその一の自前ゑ叩き別けに極め給ふべし

○目下諸嬌笑者當年之狀皆如此

○藝者の辛苦

何處の野暮ぞ妓を氣樂か家業と云ふ。中年ものも去來知らぬ。少女の時より妓となんと欲するものも其一幟を立つる朝まで其辛苦実に名狀もべうらざる者あり。仮令ばその身幼にして家貧しく。其親他年その子に依りて糊口せんとするふを通例の游藝を習ひしめざるべからず。然るに日々薪水の爲めに追ひ使はれて貧乏の足早きも

○賣奴之弊

の。豈よ四五年間遊藝よ捨るの金いらんや。是さ於て乎養女の名目を用ひ年限を定め。妓家へ賣り渡も習慣あり。その年限も五年ゟ少かゟらぶ七年ゟ多ゟらぶ〳〵身の代金も十圓ゟ廿圓まぢの間とも。人之を聞けも其廉あるふ仰天もんべ〳〵と雖ども決〳〵廉ふるものよいらぶ蓬髪汚衣無能無藝の一少女よ若干の金を出し爾後衣食住の雑費も勿論三絃踏舞種々の藝を仕込

○請聽

む毋少〳〵さも三年以上の年月を要もべし。その間の費用も幾何ぞや。稍〳〵半玉とか〳〵進で一本ふ至り最早世間並みの藝者とかり何もの席へ聘せらるゝも敢て慙かゝらぶ自後その力よ由りて利せんとする頃も早や七年契約の風立ちて。その実家へ返へさゞるを得ぶ。されもその主の真さ利をも到處も三年若くハ四年間にいるのみ喻へも恰のも官立學校の費生徒一般も謂

○藝者生徒

そざるを得ぜ身の代金の僅うかる殊に怪しむ無足らざるなり

此少女のそ乃家に住込むや始めも家婢の如く逐ひ使もれその。暇ふ技を習ふに二六時中嫌ひむあく。三絃畢れで太鼓太鼓卒れむ横笛横笛畢れで踏舞指傷き血を蘸まし盛夏も満身汗の爲めゑ浸され嚴冬も寒の為めに指凝え繻ふに調子を狂ももれで其姉分ゑ打され罵らる時もしく懲らしめ

○何思此少女為鈴公之權妻

の爲めもて食を與へぎる慘酷ゑ遭ふ。古語ふ曰ふ石の上ふも三年と雛妓の辛苦豈ゑ樹下石上乃比あらんや。已ふして技稍や熟せむ姉分ゑ從て始めく半玉ふく出勤ー自來讌席に侍もる樣子ゑり。客との應接酒樓への揭け引き撲され罵らる乍らも学でざるを得ぜ。且つ已こ出勤もれむ少ろその家を利もるの任を負へむ茶屋こ阿り客こ媚び一本も多く賣ること務勤めざるを得ぜ

○花柳曰喝咪々々
○魔王曰涙滴々落

願わくは玉の滴り
口を吹く
作吹煙管
他心

小六歌

□
□

嗚呼可愛想哉

夫れ女子生れて十二三歳も雛鶯の将に谷の戸を出んとするの時なり。幽梅の将さ綻びんとするの候なり。之を〳〵て良家の阿娘ならしめむ家婢に傳かれて春ハ閭巷に羽子を突き。鞠を弄し又も郊野ゑ出で、踏青し籠かゝげて菜摘さ日蔭を送るなら冬も玻璃窓ふ火閤を擁し草紙を讀で日を渉り時好の物をねぶりて已まざるの妙齢なる雛妓も春も春ゑ誘われて遊ぶ乃閑なふ

○請聽

冬も霜枯れゑ由て冷を告け。御茶を磑きて戸主の氣色を揖じ他所の家娘の母さ連れられ詣ふでしく。欲しき物を買ふを見ていい羨ましく思ひ。又も大福餅おでんも思ふが侭ふ口へ入らぬ。世ふ雛妓ほど頼りかきものもならじ稍しく一幟を樹るに至れを新

○仙史曰大喝咪

内氏の所謂涙にかくを振の袖とめれを最早さしまやくふく出來ぬ中ゑ茶屋夫れ〳〵への付け届け仲間の義理も十さ五ツハ

○醉翁曰通人克記之不惜惠投

自辨せざるを得ぞ。且つ抱への身なれど純粋の自前又た叩き別けの妓と春秋の衣裳その佳麗を競ふんとするも侭あらば粉飾美を爭ふんとするも心に任せば暗に羨む の一字を啣みく歎息するのみ凡そ斯る妓た七年間の光陰を長くものかと思ふあらん。既に年明けく自前となるを更らに一世帯の辛苦を増しその実母弟妹を養もざるを得ば目下物價騰貴の際鬚眉男子と雖も

○究糊口者反賺此等妓

○欺鼻下長豈無理乎

○天下重生女宜矣

活路を徘らひ。腰を鮟官に屈して俸を仰く者多き中ふ。軟柔の一女ふしく四五人を養ひ。その餘のらんことを願ふ。特夫れ餘りあらんことを願ふのみあらば初春紋付の礼服初夏の更衣盛夏の新裁仲秋の袷晩冬の綿衣その他新帯粉飾の具此社會の通慣としく一も古物を用ゆることあらば。皆か流行を追ふものとす。試みよ之を筭せば一衣一帯二三十圓の上よ出づ之を辨ずる誰れ

が力ぞ窈窕一少女の一手よ出づるなりそ
の聘よ應じ歌舞し酒を飲み欝を釀もその遑
かきもう勤まるを雖も然らざれば決しく
勤まるもうとにならば世の無情漢さこそと
思ひ之を憫みその鼻下を長ふしく可あり

○醉翁曰天下之人延過無由延

○藝者のもろ〳〵

昔し一の落語家ありり。屢々或大名の御殿へ
召され。種々滑稽を尽くし諧謔を演じたる
に。その殿よ仕ふる女子以為らく斯の如き

○醉翁曰余屢遭此且

男の妻とあらむ一生氣樂からんと。則ち勤
めを辞して後遂よ之が妻となりき。一日そ
の夫ふいふ〳〵阿主ぞ御殿へお出の時し洒落
を云なり笑談を言なりもあしざうら嘸夫婦
に成て一所よ居さなら面白からうと思つ
く故。色々辛苦しく來て見まで平生苦い顔
とし〳〵て笑談一つお言ひでないがあぜだへ
夫へ馬鹿を云へ數居と跨ぐと騒いぞり洒落
を云ふのが商賣だらうら家で苦ひ顔とし〳〵

○醉翁曰此落語家與余同感

なるが結句保養ゞ哩と。余假り〳〵妓の心を推さん夫れ妓の席に陪し〳〵意を迎へ歡を呼ぶも家業なり況し〳〵三絃を弄し聲曲をるをや。その心敢て之をなしと喜ぶに三絃を お座付ふく仕舞なく思ひ。他も酒を飲み佳肴を啣み沢山祝儀を貰ひ時々花見遊山芝居行等所謂牡丹餅を以て頰を叩らゝを望むそのなり。然れども斯る我侭ふい應ド難しと雖ども真愉快も取らんとする

○仙史曰豈獨妓而已

粋客も此心を推さんもあるべうらに

○藝者の性質を知る事

人の性質ハ必らず挙動に顕はれその也人〻〻妓の性質を知らんとするも尤もその挙動を注意もべきなり。先づその坐を就くや容乃烟草入と見て之に注目し或も衣裳を見て考へる所あるもの。而しくその妓の風俗を佳麗ならば意氣ならば何〻なく趣きあるそのも風致あるものなり。席に就

○何字注意見之

ゞ否や馴々しく又ハ樓婢と喋々し客を客臭しとも思ふ事そのの風俗年齢うを年寄りおみなるも酒乃相手に面白きものなり。障子の開閉らく〳〵言語づかひ勇みて風俗ハ淡粧意氣に作り時々客の顔を凝眸ふ見総て俠あるも俳優を愛し職人を好む浮氣者なり語少く萬事扣へ目にしく始終一歩を樓婢に讓るものも実体なるあり座興の寝入らんとするを見ても勢をつけ

○魔王曰此、疑聯可怕

歡を喚び客の氣に入る語をはゞめ総て飽きを來しめざる様注意するも老練あるものとし言へ亦敏捷あるものなり。時々漢語を用ひ不熟の洋語を挿み。獨り利口ぶるし常に書生客に接し習ひ性とかりしものかるべけれども。その実生意氣の天保錢藝者なり。三絃も彈かゞ唯客の氣をのみ迎へ又〳〵酒を飲み時々秋波を客に注ぐものし此奴必らず應來藝者なり鷹様に〳〵生意

○如此、妓易騙

○諸君記宮此、一段ヲ

氣の語氣なく又叩り家婢に媚びず客の意とても亦闇雲よ迎へざるものも必らず他日その嬌窩に女將軍とある乃度量ある者なり。游客よくその性質を見極めてその意に投じ遇らふときその遊び一段の快味を添へ果てハ情夫の中に引込わく御膳を据えらるゝの妙境に至る是ハ我粋学の奥許にしく決しく叩りに初心に傳ふべきものにはゝぞ秘そべく秘そべく

○醉翁曰余有覚言之非憶説

○魔王曰非醉翁不能雪此冤

○尤々

○春を賣るに二途ある事

世人錦帯を説く妓を目しく一概に應來妓と詈り去れども。是れ未ず二途ある事を知らざる言草なり。若し苟ふも錦帯を解ども則ち此れ應來妓ありと云べく明治天地の妓ハ悉く應來者流ありと云ちぶんバ可らず。此れ酷あり可愛想あり。凡そ應來妓と称するそのも春を賣るを本色とし三絃も付け合せるに。故に始めより價を定めく然

る後巫山に入る者かわれも真正の應來妓と言ふべけ丑ども。他に情実あらく然るその所以。その情実いかぞや。凡そ客の長く一妓を愛顧するい到底念ひれもあり。而しく未ぶ色に現さぬ。妓早く之を知るも此亦色ふ現もさぬ況しく格別好さらしい男にけらざる上も殊に素知らぬ顔をするあるべしと雖ども。恩義の繋る處情に於て黙し難く。又その心を取ること堅くうんにも。終

○醒史曰念字有無量之意味

○此情理

丑情の遂げ難きを知り愛を他の妓に移し我を疎んじ。意地づくに至ても或も我に耻を與へしめんも未ざ知るべうに殊小愛されたる客を俄うに他に奪ても聊う顔ふ係をを以て遂にその意ふ從ひ錦帯を解くものけり。是れ決しく應來妓にけら ぶ風流の情を解するものと云もん乎。余故に茲ふ二途あるものを述べて應來者流からぬ諸姐の寃を雪ぐ

○魔王曰酔翁暗似保護豊的藝者

○情夫の見立て

情夫を勧めのうさ晴らしとて。都々逸氏が言にしく流石くく妓の情を穿ちしものかり実ふや攀折の人ふ随ふを悲しみ舊と送を新を迎ふる乃妓にしられで。その憂ひを消す者かくんぞ勤まらざるなり。當時妓の情夫を擇みしを多くハ鶩の者或ハ博徒或ハ俳優よ止る様かりしが一新の世変よつれて唯此一事のみ稍上流ふ進み今ハ十中

○慷慨意長

七八ハ堅氣の人を擇むこと〻なれり蓋し情と慾との二點張り乎。抑他年身と處を

○似山半可肛門一針

るを心しく乎是故に敢て美男子を望まに又遊藝に長じ意氣を以て任ずる等の人物もペケと爲に。総しく士流商家と論ぜに他年志を伸ばして爲をなるの人物まて物艶きしく如何ぞも頼み甲斐なり別けく下々ふ行き渡り男子らしい挙動なる人を擇ぶが如し。然れども性の相集る處鶩の者職人

博徒等を愛するその猶ひとしでも此い場末の妓に多くしく中流以上の客に接するものあい稀れふ聞く處るう然わがう概しく いつでも錢遣ひ吝なしに万事に抜目ある人と情夫とするハ此社會一般の風習と云ふべし

○爲情夫亦難哉乎

○歌妓と酒樓との関係

○勿乗車

藝者と酒樓とハ遊び乃両輪にして客く此車に乗せらきて歡を取るものあり故にその

一を欠けを愉快も進むことあるうぞ飲み潰るく欣又ハ恍惚とし妓の顔を眺むる欣の一段ひるのみ。さるからに妓も酒樓有て立行き酒樓も妓有て繁昌も之を車の両輪とかも豈に誣言なしんや。然らぞその權衡に於て軽重なく平均あるべきに妓ハ如何ある地位に立つものと雖ども一歩を酒樓に譲らざるを得ぞ。若し然らばして西洋流る同權を用ゆれば酒樓を。その妓を憎み客

○歴制

○此弊豈獨妓社會乎

の命とりへども在を不在と称し〳〵呼をび或し無実の説を作りて愛顧の客に告げ断念せしめんとは是れ所謂犬乃糞の餡あるその〳〵妓の甚ぶ恐るゝ所なり然れども酒楼も亦叩りふ妓を軽蔑ことゝゝぬ情実ゆり則ち妓よ譏を構へらも種々の悪説を以て客を煽動て他の酒楼に就て飲むことを進むわゞなり。殊さ妓の玉一本に附き四銭づの剥銭を取り尚ゆ祝儀返へしと称し

○魔王曰喚起燕趙徒來

て三銭乃至四銭を取れど妓も酒楼を益をこも酒楼も妓を益する所あり然るにその權を張ることゝならばゝゝ豈ふ憐むべきにゆゝゝぞや此ゆ類もゝとと獨り此社會のみにゆらば世間亦多うるべし

○妓奴の事

五尺の躰に両個の睾丸を具へ。且つ四文五官に不足おき身にゆりゆゝゝ男子の最下等ふ位し極めゝ卑しゝ極めゝ劣あるも妓

○仙史曰怕哉理屈

奴に若くものなし。三絃を抱へ妓の尻さ付きその高履を把りその衣帯を畳み其褌の皺を延べ〻〻総て藝妓乃奴隷とかるその。誰り人間の部類に加へ〻之を待んや。然るに彼恬として之に安じ他の罵詈を顧みざるも蓋し利益あれば〻なり。東京妓の客席に赴くや必らず妓奴を従ふ。奴席末に候し野蛙一般に匍匐叩頭して賀を奉じ壽を献ず。此時客も少なくも七錢以上の祝儀を賜ふ是

○福源一般

○與拂鬚塵一者無差別

れ東京の通慣なを奴之と受わも三拜九拜〻〻去る。夫れ奴ふして日さ六名の妓を送わも一圓二十錢の祝儀を得。且つ玉一本に付き三錢の供錢を得。夫れ無能無藝目ふ一丁字かき奴ふして月ふ少なくも四十円以上の金を得他の罵詈をかへりみず自ら人外ふ安んずるも亦宜なるべや故ふ奴ふ〻〻金満家かるその柳橋の岡崎屋の如き土藏ひり地面を有せり或も金を貸そも

錢地洪水
好好頭

○又是斗大眼

のいろり或も家作をあゝく人に貸もそのいろり。試みに之を祝儀を投ずる客の資産より比べたらんかを間々奴の富に及ざるものいらゝん。斯の如く奴も利益いるゝが故ふ。奴とあるふも株式をゝく賣買し叨りふもるとも能もまゝ。若し夫れ妓奴が株を株式取引所ふ於て競賣せしめば恐らくも微々たる銀行の株券より二割方も上流あゝん。株も亦種類多い哉

○醉翁曰次郎さん

○妓と奴との関係

妓奴も妓の奴僕ふり。妓に依く生活を立るものなり。然れも妓より對して頭の挙る末ハいらゝど思ひの外。亦然らざる情実いり情実とも何ぞや凡そ奴も會所に集まりて酒樓ゝりの報告を得。妓の在不在を答へ。然して後之をその指名の妓ふ傳ふる役ふり故に若し妓ゝの奴を真の奴僕視せむ。彼れ下等人間たる地位ふ在るふも拘もらゝば怒りを

而後知之

帯びて在を不在と云ひ又も悪評を立酒楼小觸れ込み。客ならしめんとし。又情夫の間秘をべきことを嘆出し世間へ傳へ往々妨害をするあるを以て所謂憎い鷹ゆゑ餌を飼の古語の如く妓奴を真に奴視せざるなり而しく奴の三絃を抱え客席へ候ぞるも敢て祝儀一途ゆもあらばその客乃誰なるを見認めその妓を愛顧をる客にあらずして他の妓乃客なるときも窃かに他の

○持灯燈顛妓不注意千万

妓ふ告ぐる習ひなり又情夫に逢ふときも又も鼻下長を騙して金を奪ふ時も妓奴之ぞ挑灯持をかたを以て稍同等の位地に置もの

なり

○纏頭の事

纏頭とて妓ゆ與ふる祝儀の名目なり　王昌齢の詩ふ

昨夜風開露井桃。未央前殿月輪高。平陽歌舞新承寵。簾外春寒賜錦袍。

此錦袍も則ち纏頭ふして祝儀あり彼の錦纏頭の語もしく祝儀を纏頭と云ひしからん。因果道士ハ纏頭謂優技之利物と云ひしも當を得たるその也。此纏頭を與ふるもとハ東京に限りて他の地方ヨ聞こさる處かりその金の多少種々ありと雖ども五十錢もを少かからぬ三四もり多うらぬとも夫を揚代を拂ひて聘したる妓なれば纏頭をやるも遣らざるも客の勝手ヨ在りて決し

○地方人讀之應仰天

しく請求せらるべき謂もれあきに慣習の久しき今ハ本人より請求こそせされ若し客の之を投ぜざれば樓婢窮のに之を乞ひ或ハ勘定の書付へ明記もるとかり是実に憎むべき習弊なもどもその内実ハ切入て之を見れば亦已むを得ざる情実あるが如し何ともなきも妓ハ富有なるものも甚ざ少れハ〳〵大抵衣裳若くハ飾粧乃代金滞もて六七十四も付き回もるものあり。而し

て時の寒暑を問ふ業の冷熱を論ぜず平均一昼夜ふ二両の聘を受くるもの〻〻その獲る所の金を掲ぐれば

一玉二本　昼夜ふ〻四本　代一圓

一祝儀　一圓ッヽ　合二圓

○諷論

都合三圓なり月得る所乃金九十円ふ〻て奏任官ふ相当せり。婉妙たる一少女に〻〻月〻此多額の金を得るも鬚眉男子を〻〻漸殺せしむる程ふ〻ども此三円の中より

○食猫腕他似悪犬

前ふ云ふが如く妓奴酒樓等ふ割前を與へそ〻ち上會所ふ〻〻玉数ふ〻〻刎銭を取らも手に餘る所も漸く二圓二三十銭ふり。さて家へ帰れば借金の日賦月賦或く水天宮の掛銭金毘羅の講銭或も芝居の天幕寄席乃繪びら又も引幕二円の税。地代店賃種々雑多の物入ふも只妓の一柔腕ふ向ひ〻〻集る之を概算もも月末ふ餘る所果〻〻幾何ぞや。その上新衣新帯の工面も光陰の流るく

○纏頭不殺人者

に従ふて来る若し東京妓ふして纏頭を得ぜんで一日も立往らざるべし是れ揚代より纏頭を的よりする一般の習慣とあり所以あり而しく新柳以下二等すぐの藝妓ハ一圓の纏頭を与ふるも猶ヶ吝坊とする氣組みにて二円以上なくさるバ難有とも思

○我々迷惑

もび蓋し紳士豪商の游治しく如斯投ずるもり又一の弊と醸したる者あるべし二等以下も五十錢以上二円すぐ客の心ふ任せ

べけもども一円もり少く與ふることハからざるべし天神の妓毎に云ふ書生さんの三十錢も恐れべありと尤もど尤もだモウ一ッお負よ尤もだァ

○席の速のあるを好む事

○魔王曰再出

身も呼ぶれし藝妓あり。その玉を賣るそのなり故に席の長からんことを願ふならんど。次郎さんその人の外も決しく永きを願もび何故ふ然る乎と云くび。席の初めも話

も尽きび酒も旨く三絃ふも疲れば意を迎ふるの術も乏しうく飽きもぐも半日以上の永きに至れむその席よ則れ物に飽き暗々地よ欠伸を呑んで早く帰途に就うん ことを念ひ或も嬶と歎息しく永尻の人ダ。ネイ。この隠語も事に觸れ物につきて現もるしなり。讌席も斯くあるもの自ずから不興となり何の妙味もかくなるべし故に妓が席を起ち欄干ふ憑りく他所を吟め或もまで

まで席を離るしあらを飽きの來たる極点ここく早く切り上げ帰るべし然らざもば縱ひ万銭を一擲するも遊冶の快味を取ることいかもば野夫を以く遇せらく あるのみ

○歌妓のなりもて

仁義道徳を野夫とし軽薄浮行を意氣とするものも。天地間唯娼流と歌妓あるのみ。而しく歌妓尤もこれを唱ふ。さもで千金乃子を

○仙史曰大賛成

○醉翁曰所以次郎さん被愛

愛さに落魄の通人を憐れみ。情海に沈淪して一生浮む瀬なることあり。是を以て乎一旦氣ふ染まぬ髯奴の金力ふ左右せらるゝ所となり身を委しゝ小星となれども愛離き寵衰ふまゝ一時も栄華の夢裡に逍遥せしゝ或も空嚢を遺失しる心地ゝ帰藉し眉を畫き粉黛施こし復へイ今晩と現もきゝ酒肉の間ふ縱横し情痴ふ奔り色慾に走り晩花乃候ゝ及びゝ人の攀折るなゝ

○此小町烏有宛落魄

○不落付道理浮氣家業

小野の小町の歌を吟しゝ歎息も及ぶ日々に炊烟に追もるを以て知らぬ識らぬ四十島田の初老まで嬌苑に住みわび。果ても聘客の稀れなるゝ妓藉に立つこと能ども始めゝ卒塊婆小町の二舞をゝ活路ゝゝゝ糊賣老嫗となり或も寄席の三絃彈に傭れ更に當年の面影を止めぬゝゝ終たるその十中七八とに。その三十才を過ぎて茶人乃身受もる處とあるも落付

くこと能たび或た資本金を貰ふて平康の女将軍となり。或た待合茶屋を開き〻旧客を請ひ。復と残香を修め〻浮名を流すもの比々と〻て皆是ゐり。その良人に帰し〻終りを全くするものハ三千の妓中絶うれ二三に過ぎざるべし。是も少年を弄し淫行ふ荒み髯奴を騙し〻情夫ふ貢したる等の因の果にして彼の釈迦牟尼佛涅槃の場に入ること〻あらぬ。猫の名を被ふるも亦怪し

○以二三字面勿煩法延

むに足らざるかを

○野夫

野夫とた何なる人物を云ふ乎。旦那たる資格を以て遊ぶもの〻謂ふ〻歌舞場裡より擯斥さる〻隊長とあを。此野夫も大抵驅け出しの田舎士族成立ての青衿。這出しの官員在郷の豪農俄の紳士に多し〻。此野夫の意に曰く藝者た何者ぞ社會下等の営業者かり金銭を見わで咽を鳴らし媚を賣り

○醉翁曰指魔王中洲花柳仙史醒史等曰野夫乎

貴賤を擇まず人品を論ぜず寝猫せへを促がし歡心を得るに汲々たるものあり。此の如き賤業者何を以て我々に伍するを得んや我れ之を買ふ旦那あり旦那なるその何條是れと倶に愉快を盡さんや我の妓を聘もるを止ざ酒の酌ふ呼ぶのみあらんそのの口実一應尤も乃様に聞ゆるども果して酌の爲めに妓を聘もるあらで酒を飲む何ぞ酒樓を要せんや酒の酌亦何ぞ妓を要せん

○賛成々々総起立

○花柳曰大剣突

や宜しく自宅あらく飲み。酌も細君にて事足りなん。凡そ酒を飲むに自宅に於てもる程面白からぬもあり。是れ李太白その人を俟ぞしく明らなり。彼の野夫奴も已に其面白からぬを知るうちに酒樓に登るあらん。その之ふ登わで獨酌の妙あらざるうち勢ひ妓を呼ぶあらん。心已ふ自宅に飲むの面白からぬと獨酌の妙あらざるを知らむ。その心も愉快あるを願ふあらん。然らば則ち

○喝咪

十分に愉快を尽くさざるべからざるのみ。是れ粋も不粋も一般の情態ありとせば。斯の如き思ひ切りあるべからざるも尚ほ已れも旦那あり妓を買ふ客なりとて威張返つて妓を賤婦視し胸先に障り。疳癪玉ふ撲付うる輕蔑厭ふべき語をいくら妓ふ對せば果しなく如何妓も目前り不平を鳴らしイケスカネイ汚膽珍ダヨと臂鉄砲ふ彈藥を込ざるも心甚ぶ席に侍するを屑しとせば或も都々一に訴へ或

○大喝咪

も訊言を云ひ。歌舞逆しる章臺を忽ち憂ド陰氣ある所とあるも疑ひあり。彼の野夫之を見聞しくその心に快とする乎恐くも不平噴嗢々々の喇叭を鳴らし酒陣を引拂ふに至るべし。抑も神聖ある金錢を費やして馬鹿よさも嘲弄に遇ふが如き。之を大間抜けの蜆天上筧棒の行止まり即ち野夫と云ひして何ぞや。故に遊冶も旦那の資格を棄て爲すべき事ぞこそ。然れども妓と共ま

○記此一段

與ふ愉快を尽くすと云て落語家又も幇間然たる舉行も所謂似山半可を免がれざも男らしく淡泊ふ遊ぶを通人の本色とする也是を遊冶の秘訣とも然もども野夫復曰もんとも人ゝ人あり我も我あり剣突と貰ふも馬鹿ふさもるも我が自由權内あり と云もも余も野夫ふ付ける藥を病院に問合せんのみ

○遊びの種類

凡そ遊ぶ所に四種あり曰く酒樓曰く待合茶肆曰く船宿曰く妓家是あり而〳〵各その趣を異ふに

○思案坂哉其游也

○酒樓

酒樓も遊び所の本地かもども。その実甚ぐ面白からぐ何といふに先づ欲くもあき食物も取らざるを得ず。第一妓を聘〳〵之と遊ぶふ隣房に人ありて氣兼せざる能得ず殊に長座もきむ後客の障りとなれむ機を

○魔王曰醉翁自実

驗上來

計りて帰るの心配なりつ況して妓を説得せる場合かぞふる甚だ妨害なるものあり且つ酔て帰途に就くを厭ふさに當りて其處ふ眠るを得ず遂に謀反を起しく芳原又は南品ふ走るの無分別を來せ是れ酒家ふ於て間々ある例あり余故さ酒楼ふ飲むことを好まず

○中洲曰酔翁之不好別有謀反也

○待合茶屋

待合茶屋も座敷料をさりく席を賃せる業ふりその料五十錢以上一圓の間にありその組織固と酒楼と異かもで客の好みに随ふて酒肴を取り寄せ叩りに奬むることなく席も酒楼の如く四隣合壁悉く客なるこゝは甚だ稀なり故に珍鴨筋の妙も行へ想夫憐の寂寥ふ自惚も唱へ易く。冬は炬燵ふ入て妓と意氣筋もなく易く。眠らんとせば一宵を明のもざも氣支あく実ふ我家ふ妓と飲むと一般なる趣きなり其他氣兼かきも待

○酔翁曰非於余不能取此愉快

合に若くそのかゝ

○船宿

船宿とい画舫を以て業とあるそのあれど
も其組織と待合茶屋と異なる事なく楼上
数房ありて飲むに便ある待合に比されど
妓と意氣筋を以て潛伏されふ甚だ妙あり
餘い同一なるを以て茲に贅せず

○妓屋

妓屋に就く飲むも。狎客の又た情夫に見立

○醉翁曰午吾身呆返

○毛玲坊々々々

○花柳曰御注意々

てらまてる次郎もんその人乃如き者の多
くなる所あり妓の未だ聘せらるゝ家ゝ在
て閑なる時を機とし之ふ遊ふ則ち玉を二
本と極め。聘席ありきを直ちふ行くそのと約
し一壺乃酒一碟の肴あり火桶を夾んで二
人對して飲む三絃を爪彈き。聲を低く笑ひ
且つ酌む。恰うも氣樂な夫婦の趣ありて情
の濃なるあると興の限なきを以上三種の及
ぶ所ふらず去れども二階若くい奥座敷

々々

ふ〳〵ざまで他の狎客のさまざまである
と往々ゐまで成丈け寂寥と要まるものと
に。それ此の如く費少かくしく興味ゐる者
ゐまで妓乃母及び其婢ふ相應の纏頭を與
へざるべからぞ。さすれば到底多額の費用
とゐまで之と意とせざる者と格別死錢を
欲せざる者と暗に妓と繾綣の情ゐるふあ
らぞんで爲すべきことなるべしと
○上等の妓を容易く應と云ハしめ

○醉翁曰魔王被摘発秘支不知可憐

なる逸話
余ゞ飲み仲間に紅紫魔王と云ふ半可通あ
り。自から意氣を以て任じ時とくし杵屋
六童子と称も謂ふ長唄の三味線引杵屋
に擬もるなり。一夕柳橋ふ飲み喜代〇と云
ふ妓を聘も喜代風致ゐり技も亦可かり魔
王亟延三尺戀々已まぞ。以爲我ゞ伎倆く
彼を應といくめんと。則ち再三之と聘に
而しく未ざ情を語らぞ。一日喜代の紅襌日

の正午を經て西山に春くを見て戯れ云く曰く卿の紅禪色已に辞せり。余此の如き禪の人と共に寢ることを欲せざると直ちに手を指て樓婢と呼び立所に緋縮緬の大巾三尺と購かひ喜代に與へ云く曰サア之を占めすと夫れなら寢てやらうと喜代此突嗟の賜に曾ひ何の念もなく迂濶と錦帶を許しけり

○中洲曰足想像魔王當年之顔色

と。魔王ふ〜ても一生の大出來ぶく應來ぶらぬ妓と應と云く〜むるふい斯く敏捷か

○魔王栄誉無此上

る才なくんむ肱鉄砲の痛事を免ぐるべららば魔王も亦我黨の一人ある哉オホン。

明治十六年九月十八日出版御届

同　刊成

年　月

繁蔵
神田五軒町十六番地
氏

亀治郎
區通旅籠町弐番地

分店
同町壹番地

鐵五郎
神田小川町十二番地

賣捌書肆

東京芝區三島町　山中市兵衛
神田區神田五軒町　小笠原書房
同區雉子町　巖々堂
日本橋區通三丁目　丸善書店
同區同町　秩山堂本店
同區元大坂町　法木德兵衛
同區室町三丁目　滑稽堂
同區長谷川町　武田平治
同區横山町三丁目　辻岡屋文助

明治十六年九月十八日出版御届
年十月廿八日刻成

編輯人　東京府平民　増田繁蔵　神田區神田五軒町十六番地
出版人　東京府平民　東生龜治郎　日本橋區通旅籠町弐番地
發賣所　同分店　同區同町壹番地
東生鐵五郎　神田區神田小川町十二番地

賣捌書肆

東京芝區三島町　山中市兵衛
神田區神田五軒町　小笠原書房
同區雉子町　巖々堂
日本橋區通三丁目　丸善書店
同區同町　秩山堂本店
同區元大坂町　法木德兵衛
同區室町三丁目　滑稽堂
同區長谷川町　武田平治
同區横山町三丁目　辻岡屋文助